

実習における指導案と保育実践のあり方について ― 子どもの主体性の尊重とは ―

梨本 竜子・山城いつき・上原 由美

About the guidance plan in practical training
and the way of childcare practice
― Respect for children's independence ―

Ryuko Nashimoto, Itsuki Yamashiro, Yumi Uehara

1. はじめに

幼稚園教育要領、保育所保育指針には、幼稚園、保育所における保育は、子どもの主体的な活動である遊び、環境を通して行うものであることが明記されている。幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様である。近年、子どもの主体性を重視し、保育者主導となるクラスの一斉活動（課題活動）をほとんど行わないという幼稚園・保育所・認定こども園もみられるようになってきた。これまで、幼稚園での教育実習、保育所での保育実習（認定こども園を含む）における実習生の部分・責任実習は、一斉活動の遊び提案型で実施されることがほとんどであったと考えられる。しかし、本学の実習において、ここ数年実習園から、実習生に対しても一斉活動形態でない実践を求められることがあるようになってきている。

遊び提案型であっても、子どもたちが「やりたい」と思って自ら活動するのであれば、それは子ども主体の保育となると考えられるが、短い実習期間の中でクラスの子どもの姿を正確に見取り、子どもの興味・関心に合わせた的確な活動を指導計画として立案することは難しい。また、実習生はどうしても自らの立案した活動を指導案通りに進めようとしてしまいがちであり、それでは子ども主体でなくなるにつながってしまう。部分・責任実習の指導案の作成はどうあるべきなのか、そして、保育実践の中で子どもの主体性を尊重するにはどのようにしていくことが求められるのか、さらには、多様な保育形態の園がある中で、養成校において指導案の立て方とその実践をどのように学生に事前指導していくべきかが課題である。

2. 研究の目的

本研究では、保育者と本学幼児教育学科2年生を対象に保育実習Ⅱにおける部分・責任実習の実施状況を把握し、これからの実習における子どもの主体性を尊重した指導案の立案、実践はどのようにある

べきか、そしてそのための養成校の実習指導のあり方について検討する。

3. 本学における部分・責任実習についての実習指導

まず、本論文で使用する用語について整理しておく。『保育用語辞典』（2014）によれば「責任実習」とは「実習の最終段階として行われる実習のこと」であり、「保育の実情や子どもの姿・実態にあった実習になるようにする。実習生は指導計画の立案、準備、実施、評価・反省までを含めたその日の保育全体を担当と相談しながら責任をもって担当する」ものである。「部分実習」は責任実習の前段階で部分的な保育を担うもので、その場合にも計画立案、準備、実施、評価・反省を行う。

本学幼児教育学科では、実習指導の授業の中で指導案の書き方について実践的に理解できるようにしている。1年次前期には実際に学生同士で様々な集団遊びの実践をし、そのねらいなど指導案との関係性が理解できるようにしている。また1年次後期には、改めて指導案の意義や具体的な立案方法、実習での実践後の自己評価の仕方について指導している。さらに、子どもの遊びを具体的にイメージして立案に取り組めるように、前期に実践し経験したことのある集団遊びの指導案を立案する課題を課している。その後保育実習Ⅰに向け、手遊びや絵本等の指導案を立案する課題を課している。そして、1年次の3月に実施される保育実習Ⅰ（保育所）が終了後、2年次の実習に向け、春季休業中の課題として制作活動の指導案を作成している。その際子どもの年齢や人数は任意であるが、必ず試作品を作ることとしている。制作活動に限定しているのは、作る工程等段階的に細かな子どもの姿を想像する力が求められることや事前準備も経験できることなどからである。指導案作成に当たっては、本来は子どもの姿の把握があり、興味関心に合わせて立案する必要があることを伝えている。提出した指導案の中から代表で何人かが保育者役となり、子ども役の学生とグループで模擬保育の実践をする。終了後には実践者、観察者全員で気づきを意見交換する反省会を行う。

部分実習の指導案は実習園への事前訪問後、実践予定のクラスの年齢と人数、季節等事前に把握できている状況に鑑み、実習前に考案しておくことを推奨している。無論実際の子どもの姿を把握する前になるが、実習園によっては実習初日に指導案の提出を求められる場合もある。また、実習中の指導案の提出は実践の3日前までとしており、実習日誌と並行して作成しなければならないので実習生にはかなりの負担となる。そのため仮の案として作成しておき、実際の子どもの姿を確認し、担任と相談して修正するよう指導している。実施にあたり、制作活動等の場合には自由遊びをしている際にコーナーを設け、やりたい子どもが数人ずつ制作できるような所謂「コーナー保育」を推奨し、園に相談するように伝えている。

4. 研究内容と方法

(1) 調査対象

- ① 日本保育協会新潟県支部 新潟県私立保育園・認定こども園連盟主催 研修会参加保育者 12園12名
- ② 本学幼児教育学科2年生のうち、保育実習Ⅱを選択し実習した学生 132名中有効回答数108名

(2) 調査時期

- ①②共に 2023年11月

(3) 調査手続き

- ① 研修会参加者に調査協力依頼文を記載したアンケート用紙を配布し、同意を得られた参加者のみ

に回答を求めた。

- ② Webアンケート作成ツール（Googleforms）を用いて、同意を得られた学生のみにも回答を求めた。

これらの調査は、「新潟青陵大学短期大学部における人を対象とする研究倫理審査チェックシート」を遵守したものであり、新潟青陵大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

(4) 調査項目

- ① 自園で実習生が部分・責任実習をすることが多いクラスの学年とその決定方法、部分・責任実習の実施形態とその決定方法、指導案はいつ提出するか（以上選択項目）。また、部分・責任実習の際どのように子どもの主体性を尊重すべきか、その他責任実習に関する自由記述欄も設けた。
- ② 保育実習Ⅱの際、部分・責任実習を実施したクラスの学年、部分・責任実習の実施形態とその決定方法、指導案はいつ提出したか（以上選択項目）。部分・責任実習の際どのように子どもの主体性を尊重したと思うか、その他責任実習に関する自由記述欄も設けた。

5. 結 果

(1) 保育者アンケート結果

- ① 部分・責任実習の配属クラス（複数選択可）

保育者アンケートの結果において、部分・責任実習の配属が多い学年は5歳児クラスが11件と最も多く、次いで4歳児クラスが10件、3歳児クラスは4件であった。4歳児クラスおよびその他の回答はなかった（図1）。

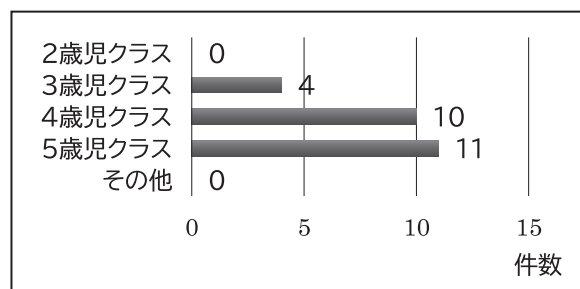


図1 配属クラス

- ② 配属クラスの決定方法

配属クラスを園から提案して決めるという回答は0件であった。実習生の希望が最多の10件であり、その時々どちらの場合もあるが2件であった。

- ③ 部分・責任実習の実施形態（複数選択可）

一斉活動かコーナー保育か等の実施形態については、一斉活動が12件で、コーナー保育、個別支援は0件であった。その他1件の回答は「子どもの姿を見てから」というものであった。

- ④ 実施形態の決定方法

決定方法については園からの提案が2件、実習生の希望が9件であった。その他の1件については、「特に意識したことがなかった」との回答であった。

- ⑤ 指導案の提出日

提出日は実践日の3日程度前が6件で最も多く、次いで実習初日が4件、その他が3件（内1件複数回答）である（図2）。

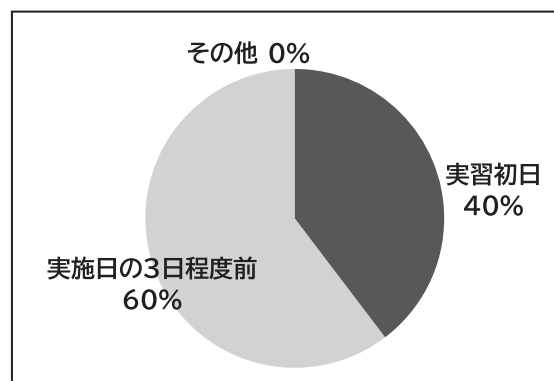


図2 指導案提出日

その他の詳細は以下の通りである。

- ・まずその学年をせめて1日入った後、そのクラスの子どもの様子を見てから
- ・オリエンテーション時
- ・実習開始後なるべく早めに

⑥ 部分・責任実習の際、子どもの主体性を尊重する方法（記述）

主な回答は以下の通りである。

- ・指導案を何度も担任と見直しする中で、子どもの声を拾いだしやすいポイントをおさえておき、ゆとりをもって実習できるようにする。子どもの声を拾うタイミングをしっかりと決めておくといい
- ・子どもがしたいこと（今流行しているあそび）を事前にリサーチできるとよい。実習生のしたいことを担当、担任となるべくすりあわせていく
- ・実習計画を立てなければいけないと思うので、ある程度の計画を立てる。オリエンテーションなどを通してできるだけ連続して該当クラスで実習し、子どもの意見を取り入れた計画に修正する。実践してみても子どもたちが参加しない、理解しない等の時は計画から外れたとしても、子どもと相談しながら実践していてもよい（失敗ではない）
- ・子どもの興味・関心をとらえ、子どもが見てみたい！聞いてみたい！やってみてみたい！と思うものを一緒に楽しむ
- ・実際の子どもの姿をふまえ、指導案を立案することが望ましいと思う。しかし、短い期間で理解するのは困難かと思うので、担任と相談のうえアドバイスを受けながら、自分なりに考えて立案してもらいたい
- ・現状の子どもの姿を見てそのクラスが興味・関心がある事、子どもから発信された物を受け止めてほしい
- ・こどもの姿を把握しないと難しい。あそびの中でクラスの雰囲気、特色がわかる。こどもとあそぶことで必要とする子どもの姿を感じて欲しいが、2週間の中で計画実践を含めると時間が足りないので、事前訪問ふくめ、もう少しあそぶ時間がほしい
- ・園での活動（その数日前からの）流れからくみとることは重要。実習前のオリエンテーションでどこらへんで行うのか、やってみてみたいことの「案」をぼんやりでもいいので伝えてほしい。そこから子どもたちへのアプローチも変わってくると思う
- ・指導案を書く、作成するのが大切と思わず、そこにいる子ども達を想像している楽しい気持ちは大切に
- ・実習期間の中で主体性を尊重すべきというのは実習生にはとても難しいと思うので、指導計画を立てた時に担任と話し合う時間を設けてあげると良い
- ・その時に子どもたちが興味をもって意欲的に取り組める内容か、実習生が計画した内容と照らし合わせて助言する

⑦ 部分・責任実習に関する自由記述

主な回答は以下の通りである。

- ・今までは部分実習内容が「一斉活動」の計画が多かったので、今後はオリエンテーション時などに、「コーナー保育」の計画も提案してみたいと思う
- ・今まででいたい一斉で行っているが、今の保育が一斉でなくなっているのので、見直す必要がある
- ・養成校がどのように指導しているか、受け入れ園に説明してほしい
- ・現場としては学生の視点からたくさん質問して欲しい
- ・様々なスタイルがあるが、指導側としては一斉活動がしやすいように感じる。しかし、学生がやりたいスタイルに沿っていきたい
- ・短い期間で子どもの様子を知り計画を立てることは難しいと思う。指導実習を行うクラス担任と対話を行い、一緒に考えていく必要がある

- ・園の保育の雰囲気や1日の流れなど、短い実習期間で理解するのは実習生にとってとても大変なことだと思う。事前に流れが分かり、何か良い働きかけが出来れば良いが、結局は担当者の真似になってしまい、本当に学びになっているか常に「これで良かったのか？」と思っている。担当者と一緒に対話しながら立案できれば一番理想だと思う
- ・実習内容が偏ることが多い。授業の中でやった内容をそのまま部分実習にとり入れているのではないかな
- ・月齢によって一斉活動が難しいクラスもある。部分実習の内容は実習生と受け入れるクラス担任での話し合いからの指導案作成でもいいと思うが、日数も決められている中での事なので難しいとも思う。活動面（生活場面）でも良いのであれば可能なクラスもでてくる
- ・養成校で教員からサポートしてもらいながら計画し、ある程度考えてから実習にのぞめるとよい。うまくいったか、いかないかを実習生は重視しているように感じる。PDCAが大事だということを理解してもらいたい

(2) 学生アンケート結果

① 部分・責任実習の配属クラス（複数選択可）

学生アンケートの結果において、部分・責任実習の配属学年は3歳児クラスが最も多く42件、次いで5歳児クラスで33件、3位は2歳児クラスで27件であった。4歳児クラスは19件、その他が9件である。その他の内訳は1歳児クラス（7件）、4・5歳児、3・4・5歳児の異年齢混合クラス（各1件）であった（図3）。

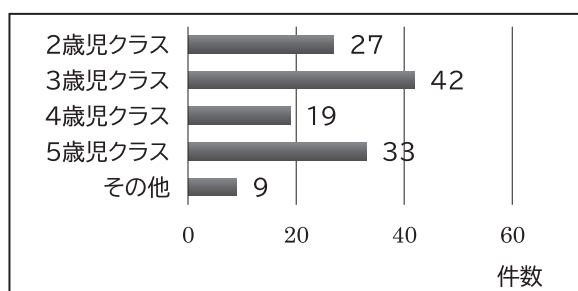


図3 配属クラス

② 部分・責任実習の実施形態

実施形態は、一斉活動が88.9%、コーナー保育は11.1%である。個別支援、その他の回答は0件であった（図4）。また、一斉活動を実施した学年の内訳の比率は、ほぼ①の部分・責任実習の配属クラスの結果の比率と同様で、3歳児クラス、5歳児クラス、2歳児クラス、4歳児クラスの順に多かった。コーナー保育を実施した学年の内訳は、3歳児クラス5件、2歳児クラス3件、4歳児クラス2件他であった。

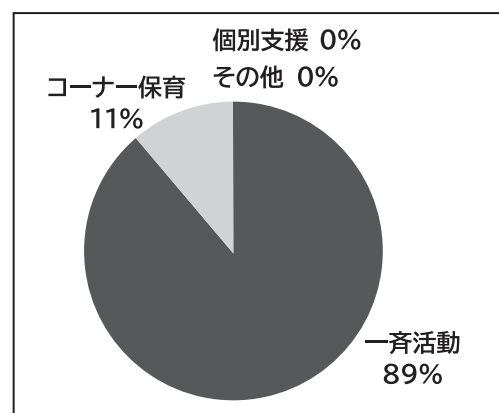


図4 実施形態

③ 実施形態の決定方法

一斉活動かコーナー保育か等、部分・責任実習の実施形態については、園からの提案が10.2%、実習生の希望が86.1%であった。その他の3.7%の詳細については、「園からの提案と自分の希望の両方」等であった（図5）。

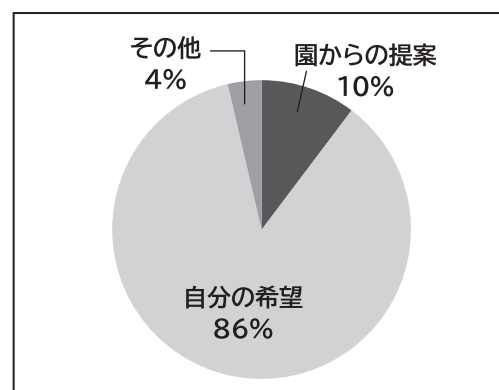


図5 実施形態の決定方法

④ 指導案の提出日

指導案をいつ提出したかに関しては、実践日の3日程度前が65.7%で最も多く過半数を占めている。次いで実習初日が23.1%、その他11.1%の詳細は、実践日の1週間前とする回答が多かった(図6)。

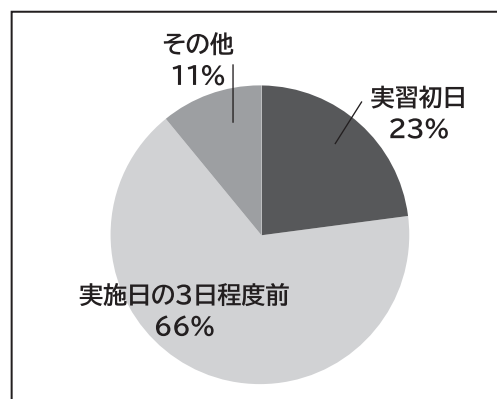


図6 指導案提出日

⑤ 提出日の決定方法

指導案を提出する日をどのように決めたかに関しては、提出が「実習初日」、「実践日の3日程度前」のいずれの場合も実習生の判断(大学の実習指導に基づいて)よりも園の指示により提出日を決めたとする回答が多く、過半数を超えるという結果であった(図7・8)。実践日の1週間前等と回答した「その他」の場合も、同様に園から指示されたという回答が多く見られた。

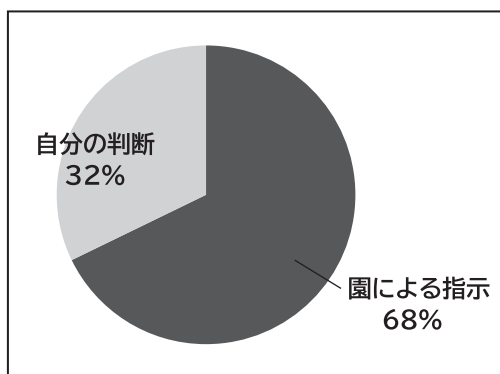


図7 初日提出の決定方法

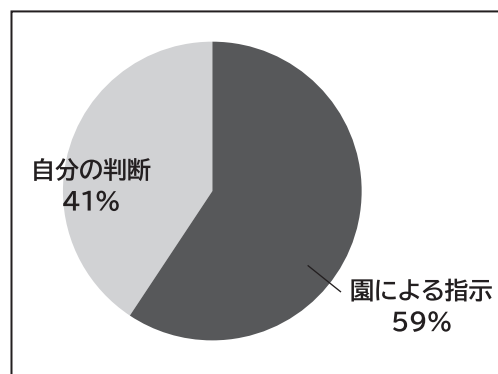


図8 3日前提出の決定方法

⑥ 部分・責任実習の際、子どもの主体性を尊重する方法(記述)

代表的な意見は以下の通りである。

- ・子どもと一緒に今日は何をして遊ぶのか決めた
- ・子どもたちのやりたいということを途中で取り入れた
- ・クラスの子どもたちが今何に興味を持っているのかを把握すること
- ・子どもたちの「やりたい」を尊重して、相談しながら活動を決めていった
- ・制作活動で画用紙に絵を描くという活動だったが、材料の折り紙に描く子どもがいて活動内容とは逸れた行動だったが、見守り尊重した
- ・遊びの中で遊びを発展させるために子どもの気持ちなどを聞き、保育者中心ではなく、そこから遊びを発展させていく
- ・製作に使用する素材を様々な種類を用意し、子どもが好きな素材で製作できるようにした
- ・子どもが満足いくまで活動できるように素材を多く用意した。用意した素材を全て使わなくても満足したら終わりにした
- ・製作活動を一斉ではなくコーナーで行い、子どもが自分から興味を持てるよう机の上にお手本と制作活動の材料を事前に置いておいた

- ・子どもの言葉で進め方の順番を変えたり、一人一人の意見を聞きながら進めたりした
- ・声掛けを中心として無理に行わせない。提案を意識した声掛けを行った
- ・責任実習の制作で、材料や完成形の想定は自分の中である程度考えていたが、子どもたちが「これは使わない」「これで完成！」と自分決めて、自分だけの制作ができるように心がけた
- ・部分実習の時でもペアを決める時は自分たちで決められるようにする、責任実習の時は今子どもたちが好きで熱中しているおもちゃを用意し、自由遊びに取り入れるなど
- ・責任の日には、子ども達に考えて貰えるように指示するのではなくどうしたらいいかな？と言って考えられるようにしていた

⑦ 部分・責任実習に関する自由記述

代表的な意見は以下の通りである。

- ・一斉保育は今行っていない状況だったが「一斉保育を行うことでの子どもたちの姿や子ども同士の関わり方が観察できて学びになった」と保育園の先生方がおっしゃっていたので、形式を変えるのも子どもたちの新しい姿や成長した姿を見ることが出来る機会になるのだと感じた
- ・この活動に参加したくない様子も見られたのでそのような子にどのような声がけをしたらいいか難しかった
- ・年齢、季節に合った活動を選ぶことがとても大切になる。また、活動をやりたがらない子への声掛けも今回よく行うことができたので、そこも気にして声掛けを考え子供たち全員が楽しく活動できるようにできたら良い
- ・子どもの気持ちを尊重しながら活動していくことで、子どもたちは期待を持ちながら過ごすことが出来る
- ・部分、責任実習までのクラスの様子をしっかり観察してそのクラスの特性に合わせて実習を行う
- ・ある程度クラスに入っていないと一日の流れを知ることはできないし、子どもたちの名前を覚えることもできないので何日か入ったのちに部分実習や責任実習をすることが良いのではないかな
- ・発達段階に合った声掛けや遊びの内容を提案することも大切だけど、そのクラスの雰囲気や子どもたちの発育など、細かいところも考えて提案することも大切
- ・事前準備が大切なこと、1人で悩まず誰かに相談しながら保育をすること、挑戦する気持ちなど改めて大切だと気づいた
- ・二週目で3日間入るクラスで責任実習だったので名前を覚えることに苦戦し、どのような子どもたちがいるのかわからなかった。なので責任実習をする際はある程度保育と一緒に参加してからがいいと思った
- ・指導案を早めに提出して準備を先生と相談しておくともスムーズにできた
- ・指導案通りにいなくても、活動を楽しんでいる子どもの姿が見られて、本当に嬉しかった
- ・2歳児では実習2日目ということもあり保育者の方が沢山サポートをして頂いたが、3歳児ではクラスに入る前から事前に沢山打ち合わせをする時間を作っていただき心配なことを相談でき、子どもたちの様子も見て聞いて指導案を書くことが出来たので、責任実習を行うクラスの担任の先生と話すことがとても大事だと感じた
- ・最初は一斉活動で指導案を作成していたが、子どもたちの様子や保育者の助言によりコーナー保育に活動を変更した。子どもたちの様子によって活動の形式を変えることも大切なのだと感じた
- ・私が実習をした3歳児はあまり一斉活動をした機会が少なかったことを部分実習や責任実習が終わったあとに聞いたので保育者に今までどのように活動をしてきたのかを聞くとそのクラスにあった活動ができるのかなと思った

6. 考 察

部分・責任実習の配属学年について、保育者アンケートは実施件数が少なかったことから、学生アンケート結果の比率と重ならなかった。しかし、保育者アンケートで最多の5歳児クラスは学生アンケートでも3割を超える2位であり、ある程度園生活が自分の力ででき、大人の指示を聞いて行動することができる年長児は、実習生にとって責任実習がしやすい学年であるといえるであろう。一方、保育者アンケートでは0件だった2歳児クラスだが学生アンケートでは2割以上あり、学生によれば園から発表会練習等の園行事に支障が少ないとして2歳児クラスを勧められる場合や、実習生自身が未満児保育の経験を増やしたいために希望する場合があるようである。学生アンケートで3歳児クラスが最も多い理由も、年中・長児よりは行事等による影響が少ないためであるかもしれない。配属クラスや指導案の実践内容について、園行事等諸々事情がありながらも、受入園側はできるだけ実習生の希望を反映させようとしていることが窺える。

実施形態は、やはり一斉活動が多数を占めている。保育者アンケートの自由記述では、「今までだいたい（実習は）一斉で行っているが、今の保育が一斉でなくなってきたので、見直す必要がある」との意見もあった。コーナー保育の実施は1割程度であり、3歳、2歳など低年齢で実施することが多いようである。実施形態をどのように決めたかでは実習生の希望が9割に近いことから、大学の実習指導で学生にはコーナー保育を勧めているが、実践のしやすさからか実習生自身が一斉活動を希望していることが浮き彫りになった。

指導案の提出日に関しては、大学での実習指導と同様の実践日の3日程度前が保育者アンケートで半数、学生アンケートで7割近くの最多であった。しかし、子どもの実態を把握する前の実習初日の提出も保育者アンケートで3割以上、学生アンケートでも2割を超えていた。提出日に関しては園側が指定している場合が多数であり、指導案は修正に時間がかかることから「仮の案として作成しておき、実際の子どもの姿を確認し、担任と相談して修正する」ことを想定している園も一定数あると考えられる。

子どもの主体性を尊重する方法に関しては、自由記述に書かれた内容も含め、保育者、学生いずれもまずは指導案の立案にあたり「子どもの姿を見取ること」「担任と相談を重ねること」が大切であるという意見が多かった。また、実践する中で実習生は、課題活動であってもできるだけ子どもの意見に耳を傾け取り入れようと意識していることが伝わった。計画にこだわらず子どもに合わせて臨機応変な対応をすることの重要性も、実践を経てあらためて認識できた様子が窺える。

保育者、学生共に自由記述に責任実習を実践するクラスの子どもの姿を見取るための十分なかかわりの必要性があげられており、事前に責任実習をするクラスになるべく多く入ることが求められていると感じた。保育実習Ⅰ（保育所）では年齢ごとの発達段階を知るために、オリエンテーション時に全学年に配属を依頼するよう学生に指導しているが、2年次実習では各園の事情、クラス担任の負担もあると予想し、特に配属日数に関して園に依頼、また学生に指導をして来なかった。1日または2日入った後に責任実習するということも多いが、それでは十分に子どもの姿を予想して指導案を立案することは難しく、子どもの主体性を尊重することにもつながらないのではないだろうか。園、担任保育者に負担となる場合もあるかもしれないが、保育実習Ⅱでは可能な範囲で責任実習をするクラスに長く配属されるよう依頼する必要性を感じた。

7. おわりに

短い実習期間の中では、部分・責任実習は遊び提案型にならざるを得ないを考える。一斉活動かコーナー保育かについては、必ずしも一斉活動で主体性が尊重されないとはいえないが、学生にそのイメージが伝わっていないことも考えられる。コーナー保育の意義を学生が再認識できるよう実際の実習生が実践する様子を動画撮影するなどして紹介することを検討したい。また、実習生に対して一斉活動形態でない実践を求める園がある一方、実習生の部分・責任実習は一斉活動であるものと考えている園も多いのではないだろうか。ある実習生が2歳児クラスでコーナー保育を希望したところ、「2歳でも一斉活動はできるから」と一斉活動を勧められたという報告があった。実習生の部分・責任実習が、現在の保育とかけ離れた活動にならないよう、子どもの主体性を尊重した活動となるよう、これまで以上に実習園との連携を強化し、養成校の実習指導のあり方をこれからも考え続けていかなければならない。そのためには、まず、子どもの各年齢・月齢の発達や生活について学生がイメージできるように教授する他、正規の実習の他にもボランティア等により子どもとのかかわり体験を増やすことの必要性を感じる。そして、子どもが主体的に「やりたくなる」ためには、保育者が多様な遊びの環境構成や援助を知ることが欠かせない。教材研究や造形表現技法等を幅広く習得できることも重要である。実習指導だけでなく、それぞれの教科目が連携し体系化していくことも今後の課題となるであろう。

謝 辞

この調査を実施するにあたり、ご理解ご協力いただきました日本保育協会新潟県支部 新潟県私立保育園・認定こども園連盟の皆様、アンケートにご回答くださいました保育者、学生の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 森上史郎・柏女霊峰『保育用語辞典 第7版』ミネルヴァ書房 (2014) p192

参考文献

- 1) 浅川繭子「子どもと保育者がともに主体である保育についての検討 ―自由保育と一斉保育の比較から―」植草学園大学紀要No10. pp.67-78 (2009)
- 2) 飛田隆「幼稚園教育における課題保育と自由保育の一考察」茨城キリスト教大学紀要No.49. pp.111-122 (2015)
- 3) 山田秀江「保育実習Ⅱにおける責任実習に関する事前指導について ―責任実習の実際から見た事前指導のありかた―」四条畷学園短期大学紀要No41. pp47-58 (2008)
- 4) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 (2018)
- 5) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館 (2018)
- 6) 内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館 (2018)